幻の水上都市「黒彦」と長谷寺の開祖「白助



(白彦主) オオハツセ、オハツセ オバステ 勝徳寺 鋳物師屋 神社共 鏡台山 雄沢川 雄略天皇(大泊瀬皇子)の兄 (姨捨山) 女沢川

依頼があり、調べらしなと黒彦にの 名はかつて千曲川の中洲にあっ開発してできた地域です。地区千曲川の西側沿いの農地を宅地 でいるうちに黒彦という地名は、にしたのは戸倉町誌です。読ん 生会会長の西澤学さんちなんでいます。昨年 調べました。 ついて話を」と 地域です。地区いの農地を宅地 黒彦の名前に いう地区があ から「さ ·0年代 黒彦長

はないかと思うようになりましジェクト」に大変重要なもので当地で始まった「さらしなプロ たかもしれません。長谷寺のある一帯は旧更級郡の政治と行政の 山が姨捨山と異名を持ち、 長野柿塩崎の長谷寺(左上のいかと思うようになりまし 当と異名を持ち、全国に知られていく大きな働きを(寺の写真の右上) との関係が濃厚に感じられ、当時 (左上の写真、 こそい そ居れ らめ

中心の郡役所があったところです。

黒彦王に縁のある人たちが当地にやってきた可能性があります。殺害されたとあるので、実際に逃れてきてはいないでしょうが、なりました。ただ、日本最古の歴史書の日本書紀には、黒彦王は皇の地位をめぐる争いに敗れた黒彦王が当地に逃れてきて地名にのお兄さんの名前だからです。地元に伝わるところによると、天のお兄さんの名前だからです。地元に伝わるところによると、天のお兄さんの名前だからです。地元に伝わるところによると、天の諸略で重要が重要な理由は、大治瀬皇子と呼ばれた5世紀の雄略天皇 なぜ、 寺を建立したと地元では伝わっていました。 長谷寺に寺伝には、 白彦王は出てきませんが、 の創建と伝わる長谷寺の存在が関係あるかもしれません。事実と して黒彦王には白彦王という兄弟もおり、 黒彦が重要な理由は、大泊瀬皇子と呼ばれた5世紀の雄略天皇▼**大泊瀬皇子→長谷寺→姨捨山** やってきのか。 確かなことは分かりませんが 何らかの関連を感じます。 一緒に逃れてきて長谷 6世紀ごろ

響きと似ていることからできたという説が有力です。の研究で、姨捨山の呼び名は「はつせ」「おはつせ」 をした可能性があるように思えないでしょうか。う名前が付けられることになったのは、この四考 殿のあった場所であることから付いた名前です。 ことに奈良の長谷寺の「はせ」も、 長谷寺の白助は、奈良県の長谷寺の流れをくんでいます。 関係がありそうな感じがしませんか。 「白彦」と「白助」-なんとなく 大泊瀬皇子 この四者が何ら 当地の山に姨捨 さらしなの里と都に (雄略天皇) これまでの先人 という音の かの働き ح 出と の宮

さらしなの里の織りなす景観、 しても、 疑問があると思います。 天皇学 マさらしなの里の "原始時代 当時の国道だった東山道の支道(シリー 都から当地にわざわざなのかです。 天皇家の黒彦の流れをくむ人が来たと そこに現れる月の美しさだと思

いろいろよう。東山首と、)『『これの仕事を』でいた人も多かったでしょう。東山首と、)『『これに仕事を』でいた人も多かったでしょう。東山首と、)『『記録を覚む人の』 - 黒彦という集落についてもう少し説明します。北寄りに通っていたので、たどりつきやすい道が は緑色の部分が千曲川の流れ。 の水上都市ですが、 いろいろな人が各地からやってきても不思議ではありません。 「黒彦千軒」とよばれるほどでした。 右上の地図をご覧ください。 青色の線が現在の千曲川の流れ、 たどりつきやすい道がありました。 東山道という国道があったので、 の中洲にある大集落 農業を営む人の集 戸倉町誌の解説

られた名前です。ただ、その証はいまもあります。黒彦神社は現くなってしまいました。現在の黒彦区はその歴史にちなんでつけ 古の歌集「万葉集」で、 都という言葉ができる前のまだこんとんとした時代です。 向こうにあるのは大水で流されたためだと伝わっています。 しの実家の菩提寺である勝徳寺も千曲川の東側にあります。仕の千曲川の流れの東側の千曲市千本柳区に残っています。 それがたび重なる大雨による洪水で、 雄略天皇の治世の5世紀は、 最初の歌 さらしなの里の原始のころ、 (右に掲載)を詠んだ大変、 江戸時代の初めには、

彦はどんなところだったのか、名をつけたくなってもおかし、 みこ)」という音が飛び交って 要な天皇に位置づけられています。 黒彦王に縁のある人たちの会話の中では弟の「おおはつせ(の - その里を代表する山に姨捨山の呼び 自分たちが住み着

雄略天皇(黒彦王の弟、大泊瀬皇子) 家告らせ この岡に み そらみ 名^な菜摘 ます やまとの

しなべて 敷きなべて

国にね児っち 家をも名をも